

5.2. 吉成 安恵氏 (独立行政法人国際協力機構九州センター JICA 九州 所長)

『先見性』×『ソフトパワー』×『スピード感』を生かし、世界から熱い人が集まるまちに



吉成 安恵 (よしなり やすえ)

大分県宇佐市出身。

JICA (旧・国際協力事業団) 入構後、研修事業部、社会開発協力部、インドネシア事務所、JICA 中国次長、人事部審議役などを歴任。

2021年に独立行政法人国際協力機構九州センター (JICA 九州) の所長に就任。

「過去から現在まで絶えず先見性のあるまち」

過去から現在に至るまでの北九州市の取組を思い返した時、「先見性」のあるまちだと感じます。具体的には、早くから3R(リユース、リデュース、リサイクル)といった環境問題や、ジェンダー平等の問題について、市としてコンセプトを磨いて具体的な手立てを講じられてきました。

環境問題については、世界的にもまだまだ関心が高まっていなかった時代から、北九州市では近代化に伴い表面化してきた負の側面に対して、「技術」と「意識」の両面からアプローチしてきたと思います。「MOTTAINAI」を提唱され、環境分野でノーベル平和賞を受賞されたワンガリ・マータイ氏も、北九州市を視察された際、「ここが聖地だ」と発言されました。当時の北九州市の取組は、日本のみならず世界でも非常に新しかったのです。

また、北九州市におけるジェンダー平等への取組については、環境問題に比べてあまり知られていない点があったと感じています。素晴らしかったのは、竹下内閣の時代に、「ふるさと創生事業」として各市町村に交付された1億円を、男女共同参画センター「ムーブ」の設立資金として活用されたことです。現在ほどはジェンダー問題が注目されていなかった時期に、未来のあるべき姿を構想し、組織化された先人が北九州市にいたということです。

JICA と関係の深い国際協力の分野でも先見的な取組がありました。水道事業で「プノンペンの奇跡」を起こしたのは北九州市であり、担い手の中心は市役所の技術職員の方でした。国際協力は、市にすぐに直接的なメリットがあるわけではありません。「面倒だ」と受け取られる場合もままある中、中長期的視点で考え、熱い思いで取り組んだ方がいた。このような熱い人を引き寄せる魅力が北九州市にはあると思います。

「自然と都市のバランスが素晴らしい」

北九州市の魅力は、自然と都市のバランスが素晴らしいことです。文化についても、市立美術館は素晴らしい芸術作品を安価で楽しめるし、いのちのたび博物館は、国立科学博物館と双璧をなす存在と言えます。ゼンリンミュージアムも、歴史的な地図から「世界の中の九州」を俯瞰することができる興味深い施設です。

このような文化的な資源や自然、城下町などの歴史を含めて、非常に多様な構造でミックスされた都市として魅力があります。他方、エコタウン、ピオトープなどもあり、私も一市民として大変魅力的であると感じています。

「ソフトパワーとスピード感がポテンシャル」

現在の北九州市が持つポテンシャルは、「ソフトパワー」と「スピード感」だと思います。

「ソフトパワー」については、先にもお話しした「熱い人」を引き寄せる魅力、住みやすさや福祉といったことも大事ですが、それだけではない人の魅力があるということです。

「スピード感」については、エコタウンから生まれている企業、そこから産み出される環境リサイクル関係等の新しい技術、GX を先取りする取組が挙げられます。

どちらかと言えば保守的な地方都市が多い中、北九州市はエコタウンの認定も早く、最近では外国人材の特区認定など、様々なことに果敢に取り組まれています。「やるべき」と思った時にすぐに取り組む「スピード感」があると思います。こうした「ソフトパワー」や「スピード感」は、先駆的な取組を積み重ねる中で培われたものだと思います。その中で、挑戦への多くの障害や軋轢をも乗り越えてきた先人の努力を垣間見ることができます。

最近で言えば、当センターの職員が北九州市のサブカルの面白さを生かした展開です。

具体的には漫画ミュージアム、且過市場の映画、フィルムコミッションなど。そこで、JICA が受入れている海外の行政官や留学生等を対象に、ポップカルチャー体験ツアーを企画・実施したところ、大変好評でした。市の担当部署にもサポートいただいて実現できたわけですが、文化で地域を振興していく取組が根底にある、このことが海外の人にとっても勉強になったようです。

「課題の早期克服を都市のブランドに」

様々な課題に対して、いち早く取り組んできたことが、北九州市のブランドになってきているのではないのでしょうか。そのような姿勢を生み出してきた行政としての北九州市の良さを大切にしていきたいと思います。

他方、社会課題は、世界で一元化が進んでおり、日本の課題は、すなわち世界の課題となっています。経済格差、都市地方の格差、経済成

長と環境のバランス、そこにスピード感をもって進める、という点については北九州市に優位性があると思います。

国際協力は、90年代まで、先進国が途上国に伝えていくといった一方的な関係性であったと言えます。しかし、これからは相手国と一緒に協働し、新しい価値を生み出す（共創）ではないかと考えています。そう考えた時、北九州市には、世界から人をひきつけるポテンシャルがあると思います。海外の若者・研究者がここに来て、北九州市の課題解決に向けた取組に対して、彼らと一緒に協働し、外からの発想も取り入れることで新しいものが生まれてくるのが期待できるのではないのでしょうか。

今後数十年、日本の人口が減っていくことは分かっている訳ですから、その意味でも北九州市が世界から人をひきつけられるようになることはとても重要でしょう。

「観光だけでなくインバウンドが重要」

「稼げるまち」というのは、近江商人の「三方よし」を意味していると思います。日本の商売に元々ある徳を大事にする精神、これが現代で言う「持続可能」につながるという価値観が、若い人にも広がっています。これまで北九州市が大切に、レガシーとして有してきた価値観だと考えます。

今や、東京中心の開発思想では、国際協力でも上手くいかないし、地方が倒れたら東京も日本もダメになります。「地方から東京」、「東京から海外」ではなく、地方から直接海外につながる、そういうことも十分できる時代です。こちらから行くだけでなく受け入れもする。観光客だけではなくインバウンド、地域を発展させるアイデアを創出するインバウンドがこれから重要になるのではないのでしょうか。